

## 第1章

# 初心者のための、歌舞伎って何だ？

歌舞伎は高尚な芸術と思うなかれ。  
庶民がワクワクする古典芸能なのだ。

# 家康とお国。ともに慶長八年が 天下一への出発点となった

歌舞伎の原点は異風・異相  
倒錯したエロティシズム

慶長八年（一六〇三）春。天下分け目の関ヶ原の合戦から三年後、政治と芸能のまったく異なる分野で歴史上特筆すべきことが起こった。

一つは戦国時代の覇権争いの勝利者・天下一の男となった徳川家康が征夷大將軍の宣下を受け、江戸幕府を開いたことである。ここに徳川氏による幕藩体制の礎が築かれ、以後二六〇年に及ぶ太平の世が続くことになる。もう一つは出雲大社の巫女

を名乗るお国なる女性が、京の都で男装して「傾き者（ちかきもの）」に扮し、女装した狂言師が演じる茶屋の女と戯れるさまを歌と踊を交えて演じるというまったく新しい芸能を創始し、これが今日まで続く歌舞伎の原点となったことである。人々はお国の演ずるさまを「傾（ちか）き踊」と呼び、天下一と讃えた。「傾（ちか）く」という言葉には常軌を逸するとか、自由奔放にふるまう、異様な身なりをするという意味があり、伝統や権威、常識といった社会の秩序に縛られることなく、勝手気ままにふるまったり、生きるこ

とを表している。

お国が真似た当時の「傾き者」は関ヶ原の合戦以後、都大路に急速に目立ち始めた異様な出で立ちをした放蕩無頼の徒の装いだった。彼らは南蛮風俗の水晶のロザリオや黄金のネックレスで身を飾りたて、覆面をしたり、革製の帯や羽織をまとったり、一髪を越すような長い刀を差したりと、その異彩ぶりは目を見張るものだった。都の人たちは憧れにも似た気分で彼らを眺めていたのだろう。やっと訪れた安定と自由の気分、新奇な物を求める気風が町全体に漂

っていたのである。

天才お国はこれを素早くキャッチした。まず黒の僧衣をまとうて念仏踊を踊り、そして男装して茶屋の女に戯れ、最後は客席までをも巻き込んでの総踊。官能的倒錯感、身も心も跳び上がるような躍動感はたちまちのうちに人々の心をとろけさせてしまったのである。

### お国の革新性が、歌舞伎の基礎を作った

お国の登場はわが国の演劇史上画期的なことである。女性の先行芸能者には傀儡女や白拍子などがいたし、同時期には女猿楽や女房狂言に携わる女性たちがいたことが知られている。お国の妻は漂泊の遊芸人が、北野神社に定舞台を持つたことである。その時期は慶長九年頃から十二

年頃までというが、新興芸能が不安定な勧進興行や掛け小屋と違って定舞台を有したということは、放浪芸から新たな局面への転換ともいえる。

また最先端の風俗、いうならば生身の人間を舞台上に上げたことの意義も大きい。これは従来、彼方から「まればと」として立ち現れる神霊のみが立つことが許されていた舞台に、生身の人間が立つことへの端緒が開かれた、まさにエポックメイキングといってもいい瞬間だった。そして官能的な好色性は、上方歌舞伎の重要なレパートリーである傾城買狂言へとつながっていくし、異風・異相の出で立ちは、江戸歌舞伎の極端にデフォルメされた荒事へとつながっていく。それゆえ、お国は歌舞伎の始祖といわれる。

お国は実に微妙なタイミング、奇

跡といってもいい時代の谷間に「傾き者」を舞台に上げた。秩序を無視し、異風・異相に美意識を感じるような人間は、家康の考える、がっちりと身分制度を固めて主従の関係を重んじる幕府の方針とは合わない。胸元でエキソチックな輝きを発して人々を幻惑したクルスにしても慶長十七年（一六一二）のキリシタン禁令以降は掛けることはできなかっただろうし、またお国を幼い頃から鼻肩にしてくれた宮中の人たちも元和元年（一六一五）に発せられた禁中並公家書法度以降は、大っぴらに芸能者を宮中や自邸に招きにくい幕府からの締めつけが始まっている。

関ヶ原の合戦後の束の間の解放感と徳川政権の成立期であったからこそ、お国の「傾き踊」は成立しえたのかも知れない。

## 豪華絢爛、融通無碍、 人間洞察の伝統芸能

### 単純明快でわかりやすい大衆芸能

歌舞伎は、舞楽、能、狂言、文楽などと並んでわが国が世界に誇る伝統芸能である。その成立は慶長八年（一六〇三）、京都四条河原や北野神社社地の仮設舞台という。

以来四百年もの長きにわたって数多くの名作と名優を生み続け、脈々とその伝統を守り伝えてきた。このように言うと、いかにも高尚な演劇で敷居が高くて取っつきにくいといった感じが漂ってくる。「子供の頃から観慣れてないと、わからないんだろ」「セリフだって何を話しているか聞き取れない」というじゃないか」等々。

さにあらず。確かに歌舞伎は一度も舞台を観たことのない人にとっては、ちょっと敬遠したい雰囲気

歌舞伎は決して敷居の高い古典芸能ではない。美しさに酔いしれ、ともに怒り悲しみ、面白ければ大笑いすればいい。

を持つている。だが、歌舞伎はある意味で単純明快。実にわかりやすい大衆芸能である。

たとえば舞台に人物が登場してくると、衣装を見ただけで人物設定が見て取れる。豪華絢爛な衣装に身を包み、気品を漂わせながら楚楚々と舞台上で登場する高貴な姫君。無骨で融通の利かぬ威圧的な武將。義理と人情の板挟みの中で揺れ動く町人。世の中広しといえどもこれほどの悪人はいないという究極の悪の匂いを辺りに発散させる男、といった具合に衣装と化粧だけで、まず人物設定が理解できる。それは、多くの役者たちによって蓄積され凝縮された人間の様（こしら）えに映し出されているからである。

### 時代を超越する魅力の秘密

ではなぜ、観ただけでわかるような単純なものが

## 歌舞伎の歴史

- 1603年 出雲のお国が、傾き踊を始め  
る。
- 1624年 江戸に猿若座ができる。
- 1629年 遊女歌舞伎の禁止令が出る。
- 1652年 若衆歌舞伎の禁止令が出る。
- 1673年 市川團十郎によって荒事が  
始められる。
- 1682年 井原西鶴が『好色一代男』を  
発表。
- 1703年 近松門左衛門の人形浄瑠璃  
『曾根崎心中』が大坂・竹本  
座で上演される。
- 1720年 『心中天網島』が大坂・竹本  
座で上演される。
- 1722年 心中物が禁止される。
- 1736年頃 舞台装置として花道が確立  
する。
- 1747年 人形浄瑠璃『義経千本桜』が  
大阪・竹本座で上演される。
- 1748年 『仮名手本忠臣蔵』が上演さ  
れる。
- 1758年 廻り舞台が完成する。
- 1765年 鈴木春信が錦絵を発表。
- 1813年 『於染久松色読版』が江戸・  
森田座で上演される。
- 1814年 清元が創始される。
- 1825年 『東海道四谷怪談』が江戸・  
中村座で上演される。
- 1840年 『勳進帳』が江戸・河原崎座  
で上演される。
- 1842年 江戸三座が浅草に移転する。
- 1853年 『与話情浮名横櫛』が江戸・  
中村座で上演される。
- 1862年 『青砥稿花紅彩画』が江戸・  
市村座で上演される。
- 1872年 守田座が新富町に移転する。
- 1889年 歌舞伎座ができる。

四百年もの長い間、飽きられることなく存在してき  
たのだろうか。そこに歌舞伎の歌舞伎たる由縁があ  
る。一言で言うなら、歌舞伎は人間の美しさ、悲し  
さ、辛さ、強欲さ、真つ正直さ、嫉妬心等々をあま  
すことなく描き切っているからである。人間の本質  
は時代がどのように移り変わろうとそんなに変わる  
ものではなく、人の心を揺り動かすのであろう。  
また、襲名と世襲制によって伝えられる家の芸は、  
役者の力量と工夫をいやが上にも磨かせる。木戸銭  
を払うのは観客である以上、つまらない役者の芝居

にわざわざ出掛ける者はいないからだ。  
史実をベースにしながら、荒唐無稽、破天荒な筋  
書きが展開したり、またありもしない動物が登場し  
て場内を湧かせたり、宙乗りにワクワクしたり。  
歌舞伎は決してありがたがって拝見するものでは  
ない。華やかな衣装を「綺麗だなあ」と感嘆し、気  
の毒な人物を「なんて可哀相な」と涙を流し、早替  
りに度肝を抜かれ、面白ければやんやの喝采を送る。  
そして家の芸と役者の力を堪能する。  
それが歌舞伎である。

## 男装の麗人・出雲のお国の 念仏踊から始まった歌舞伎

### ●京雀を興奮の増塙あつぼに たたき込んだお国

歌舞伎の創始者・出雲のお国は出雲大社の巫女で絶世の美女であった、いやそんなに美人でもなかったとさまざまな逸話に彩られているが、実際のところはよくわからない。だが、今日まで脈々と民衆のエネルギーを吸い上げながら伝えられてきた歌舞伎の元祖であるからには、一目見ただけで身も心もとろけさせてしまうほどの美女であった、と思つておこう。

このお国が宮中の紫宸殿ししん前庭に、「ややこ踊」でデビューするのは天正九年（一五八一）といわれるが、四条河原の掛小屋舞台に男装の麗人として颯爽と現れ、たちまちのうちに京雀を熱狂の増塙にたたき込んだのは慶長八年（一六〇三）のことである。

血なまぐさい戦乱の世から天下統一へ。安定の世の到来で民衆のエネルギーは一気に爆発。そこへ天才プリマドンナ・出雲のお国が登場した。

ただし四条河原という場所に関しては資料によつてまちまちで、五条橋のたもととしてあるものや、北野神社の境内という説を取つているものもある。

### ●風流のうねりから誕生した天才プリマ

お国が傾き踊で歴史の舞台に登場するのは、豊臣秀吉によつて天下統一がなつたと思う間もなく、文禄・慶長の役による朝鮮出兵、秀吉の死去、関ヶ原の合戦、豊臣氏の衰退、そして徳川家康が征夷大将軍に任ぜられ徳川幕府が成立という、実に血なまぐさい覇権争いとその終焉の時代である。思えば公家社会の崩壊以来、武家が国取りを争つた約四百年間は常に戦乱の時代であった。そんな血で血を洗う戦乱の世の終焉期から安定の時代の幕開けに向けて、民衆の解放的なエネルギーが爆発したであろうこと

## 出雲のお国



(京都国立博物館蔵「阿国歌舞伎図」を参考に作成)

ナが登場したわけである。

の絵も残っている。

いずれにしても高まる解放感のうねりを一身に浴びて天才プリマドン

は、男装したお国が茶屋女と戯れる様子を伝えているし、その名声を受け継ぐ二代目お国の豪華な小袖に大脇差、胸にはクルスを掛けた男装姿

は想像に難くない。

京や大坂では豪華な衣装に華美な飾りを着けて町に飛び出した人々が鉦や太鼓を打ち鳴らして踊り狂う、「風流」という一大絵巻が繰り広げられたという。お国の出現は、このような民衆自身の歌や踊りに対する熱狂的な高まりを背景にしている。

この時期、風流の嵐が巻き起こる京の都を目指し

て多くの女芸人が地方から上ってきたが、中でも出雲のお国は出色の存在だった。お国は黒の僧衣をまとい、首に長い数珠を掛け、胸には燃えるような紅色の紐で吊るした鉦を下げ、「光明遍照、十方世界念仏衆生、撰取不捨、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」「はかなしや、鉤にかけては何かせん、心にかげよ弥陀の称号」と唱えながら、河原の掛小屋の舞

台を巡ったという。そして男装であ

る。いったん走り出した、倒錯したエロティシズムと華やきの世界はとどまるところを知らない。『当代記』

## 相次ぐ弾圧を逆手に取り、芸を磨いた傾き者の系譜

### 傾き者が放つ放埒さや異装への憧れ

「歌舞伎」の語源は、異常な放埒さやふざけた振る舞い、常軌を逸した行いなどを意味する「傾かぶく」の連用形にあり、江戸時代は「歌舞妓」と表記していた。「歌舞伎」となるのは明治以降という。

お国が登場した頃は、派手で人目を引く髪形や着物に身を包んだ若者が徒党を組んで町中を練り歩き、乱暴狼藉を働いたり、男色に耽つたりという光景が京や大坂で顕著だった。人々は彼らを「傾かぶき者」と呼び、眉をひそめながらも無頼が放つ放埒なエネルギーにある種の憧れも抱いていた。

お国の傾き踊がこれらの若者の装いやパワーをすばやく取り入れたことはいうまでもない。男装の麗人・お国はこのような社会情勢から生まれたもので

妖しく頹廢的な遊女歌舞伎は禁じられ、次に登場した若衆歌舞伎も風俗の乱れから弾圧の憂き目に。そして成人男性のみの野郎歌舞伎が誕生。

あり、倒錯した性の転換がもたらす官能的な踊は、まさに「傾かぶき」だったのである。この頃の伴奏楽器は能と同じく笛、小鼓、大鼓、太鼓であった。

妖しく官能的、かつ華麗な舞台に飛びついたのは観客だけでなく、京都色町の遊女屋の主だった。四条河原に練り出して舞台を出し、男装したスター扱いの遊女を中心に歌や踊を練り広げ、大人気を獲得した。すると次々と遊女屋が座を旗揚げして京の都は歌舞伎熱一色に染まったかのような様相を呈したという。渡来の新楽器、三味線が加わったのはこの頃である。

### 弾圧された女歌舞伎、若衆歌舞伎

彼女たちは華やかな群舞による煽情的なショーを展開し、当然のことながら売春も伴ったため、幕府

## 歌舞伎の変遷

### お国歌舞伎

出雲の巫女・お国が、大社修復の勧進と称し、諸国で踊を興行し、人気を博す。お国は、踊がうまく、男装をすることなどで話題をまいた。

### 女歌舞伎

お国歌舞伎の模倣として、全国に女歌舞伎が流行。ほとんどが遊女の副業であったため、幕府は風俗の乱れを理由に、禁止令を出す。

### 若衆歌舞伎

美少年を主役にした、踊りや狂言。女歌舞伎が禁止されると、一躍注目を浴びるようになった。しかし、美少年が男色の対象となることから、幕府はこれも風俗の乱れを理由に禁止。

### 野郎歌舞伎

前髪を剃り落とした成人男子の踊や狂言として、幕府が許可。これが今日の歌舞伎に至る。

は風俗の乱れに手を焼き、ついに寛永六年（一六二九）、女歌舞伎禁止令を出すことになる。他の女性芸能もこのとき一斉に禁止されてしまった。隆盛の極みに駆け上りつつある歌舞伎にとつて、これは大きな痛手となった。以来、近代まで日本に女優が育たなかった理由はここにある。

次に登場するのは若衆歌舞伎である。前髪立ちの美少年を主役として舞台に上げ、踊や軽業、能狂言などを演じさせた。美少女と見まごうほどの美しさを男色の対象として寵愛する衆道の風習は古くからあり、売色を伴うことからこれもまた風俗の乱れを引き起こすとして、幕府は承応元年（一六五二）また

また禁止令を出すに至った。四条河原のお国の念仏踊や、傾き踊から約五十年後のことである。

禁止令によって弾圧された歌舞伎だが、民衆の支持と関係者の再三にわたる嘆願によって翌承応二年（一六五三）、再び興行を許される。だが女性も若衆もためて、成人男性のみによって演じる「物真似狂言尽」であること、そして好色性を除くことがその許可条件であった。これが今日の男性のみによって演じる歌舞伎に続く、野郎歌舞伎の誕生である。

## 河原は生と死、光と闇、 聖と賤が交錯する特異な空間

河原は処刑の場であり、同時に聖なる空間でもあった。出雲大社は黄泉よみの国の象徴。その巫女・お国が立つべくして立った不思議な空間だ。

### 無主の地Ⅱ河原の持つ特異性

歌舞伎発祥の地を、資料によっては北野神社境内あるいは五条橋のたもとと記してあるものもあるが、大半は四条河原の掛小屋という説を採っている。河原というものが有してきた特異な場所性から推察すると、ある種猥雑で、倒錯的で、煽情的で、暴力的で、破壊的で、なおかつ神聖な世界へ誘う「傾かたきⅡ歌舞伎」が河原から誕生したと考えるほうがまっとうな気がする。

河原の持つ特異性、それは生と死、聖と賤のはざまにあつて、「無主の地」ということである。古代社会において国家というものが誕生して以来、荘園領主も戦国大名も、寸分あますところなく税を取り立てる対象として土地をとらえてきた。そんな中で

唯一手をつけることができず、徴収の対象から外れてきたのが河原である。ちよつとした野菜くらは栽培できても、いったん大雨で洪水が出ればひとたまりもなく流されてしまい、生命さえ失いかねない。河原には、生産に欠かすことができない永続性が備わっていない。

### 河原は死の穢れと浄化が混在する空間

川のそばへ一人で行くものではないとか、夕方、河原へ行つてはならないと、子供の頃に言われた記憶はないだろうか。川の流れに足を取られて溺れることを恐れたものでもあるが、ここには川や河原の持つ「死の穢れ」に触れることを忌む根源的な心理が作用していることを忘れてはならない。

川は流し雛や七夕の笹を流すことに象徴されるよ